

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年3月8日

BMJ論説：

「コロナとともに生活する：Living with covid」という言葉から何を学ぶか？

【松崎雑感】

英文解釈の話です。この数百日の翻訳作業をやってきた身として、字面の後ろにある意味を探ることの大事さが分かった論説です。

私が大事だと思う部分を赤字で示しましたが、半分近く赤字になりました。

大事なものは、「Living with ○○」という「あきらめ」の発言は止めましょう、という事だと思います。

「コロナとともに生活する：Living with covid」という言葉から何を学ぶか？

Stokoe E, Simons S, Drury J, Michie S, Parker M, Phoenix A, Reicher S, Wardlaw B, West R. **What can we learn from the language of "living with covid"?** **BMJ**. 2022 Mar 3;376:o575. doi: 10.1136/bmj.o575. PMID: 35241485.

新型コロナパンデミックの当初から、イギリスをはじめ多くの国で、「living with covid」、「live with it」、「learning to live with the virus」という言葉が巷にあふれた。

これらの言葉の解釈が、「新型コロナを受け入れるが、それを仕方がないものと受け入れてはならない」という意味と、「新型コロナとうまく付き合いながら、新しい日常に適応しよう」という意味に二極化した。

この2年間で、様々な利害関係者、党派の間で、新型コロナ対策への対応が分かれたことを如実に示している。

今年初めには、メディアと政治家サイドから両方の意味で「living with it」というアピールが多く発信された。1月1日に保健および社会的ケア国務長官サジッド・ジャビッド氏の、医学的対策（ワクチン、検査、抗ウイルス剤）と市民的自由の問題に関する論文が発表され、彼は「we must try to live with covid」と主張した[1]。

その3日後、フィナンシャルタイムズに「新型コロナなど存在しないというふりをせず、長くこのパンデミックと付き合うための計画を考えることが必要だ」という論説が掲載された[2]。

住宅およびコミュニティ工場担当長官ミカエル・ゴーブ氏は、1月11日に「イギリスはコロナとともに生活することを学ばなければならない」と表明し、「政府が制限強化を呼び掛けたことは誤りだ」と認めた[3]。

2月21日、ジョンソン首相は、現在のコロナ対策に関する公式声明に「living with covid」という言葉を入れた[4]。

「living with covid」の解釈が、政治的、個人的、実践的に二つに分かれている状況は、さらに拡大するだろう（テレグラフ紙には、「コロナ対策を積極的に進めると反動がおきる」とか、「コロナから別のことに目を移した方が良い」「コロナとともに生きるという事は、一人一人が決意して…」などと述べられている）。

われわれはこの決まり文句が両義的に解釈されないように、そして生産的な取り組みを促進する役割を果たせるように、コンセプトをとらえなおす必要がある。

「to be lived with ○○」という言葉は1951年が初出であり、当時は否定的な意味で使われていた（例えば、Living with it for years, in silent suffering : 沈黙の苦しみの中で長年それを抱えて生きる）。

新型コロナパンデミック以前には、「living with virus」という表現はもちろんHIV/AIDSに関連して行われたものである。そして、「living with it」という表現は、生存期間を延ばすための医学的治療に関する報告書の中で、肯定的意味合いで使われたものである。

この「it」は、病苦、死亡、苦痛（例えば子供の死など）、あるいは貧困（悪性インフル、高金利など）、環境問題（水不足、気候変動など）を意味して使われることもある。ただし、耐え忍ぶ（live with）問題が、個人的原因による苦境（悲しみ、死亡、難病など）と、社会的原因による苦難（気候変動、経済危機など）の場合があり、質的に同じものとは言えない。

2020年初めから、「living with it」の「it」が新型コロナとなった[7]。2020年2～3月にかけて、新型コロナ死亡率をインフルエンザ、マラリア、がんなどと比較する報道が増えた。

多くは否定的（コロナの死亡率が高いこと）意味合いで使われたが、「学ぶ」「援助する」「適応する」「新しい日常」という表現とともに建設的、楽観主義的意味合いで使用されることが、特にオーストラリアやシンガポールなどの国々から多く発信された。

また、漠然と「日常を取り戻す」という意味合いで、新型コロナの深刻さから目をそらし、対策の努力を放棄して、新型コロナ被害に身をゆだねる意味でつかわれることも増えた。

その結果「living with covid」は、「ゼロコロナ」と「コロナを無かったことにする」という両義的な意味合いを持つようになってきた。

「living with something」というような慣用句は、それ自体が比喩あるいはキャッチフレーズであるため、人々の心を惹きつける力がある[8]。

「Living with X」は日常会話で数多くのシチュエーションに対して頻繁に使われる。イギリス英語では、live with somethingは「to accept or continue in a situation that is difficult or unpleasant解決が難しく不愉快な状況を受け入れて耐え忍ぶ」という意味で使われる。

同義語は「to bear with something; to endure it; to suffer it; to accept it; to be resigned to something; to tolerate it; to face up to something unpleasant.」などである。

日常会話では、このような慣用句が、話を締めくくる時、議論を終了させるとき、議論から逃げ出す時に使われる。

したがって、「you've just got to live with it 我慢しなければしょうがないではないか」という言葉は、これ以上議論したくないというけんか腰で使われることになる。不平不満に満ちた議論に終了通告を与えるわけである。

(例えば新聞記事では、Covid is here to stay, we just need to carry on as normal and learn to live with it コロナが続いているという現実を、新しい日常として受け入れる覚悟を決める必要がある、という風に締めくられる)

Live with itという表現は、自己満足的にあるいは断定的に決着をつけたい時に使われる。つまりjust、simply、need/have/got to、mustと同じ意味となるだろう。

「living with covid」という言葉は、もはやパロディ、あるいは皮肉を込めて使われる。例えば「We've just got to learn to live with Boris Johnsonボリス・ジョンソンと一緒に暮らすことを学ばなきゃ＝あのジョンソン首相に付き合っていくほかない」という風に。

またこの言葉の「**主語**」が問題である。一緒に暮らすことを学ぶのが、自分なのか、あなたなのか、別な人なのか、あいまいなことが多い。われわれは新型コロナと一緒に暮らすしかない、と言うばあい、われわれとは、全国民なのか、一緒に暮らすためのリソースを持つ者も持たない者も「われわれ」という言葉の中にまとめこんでよいのか、という問題がある。

この論説は、最初に「live/living with it」という言葉から「learn/learning to live with it」という表現が派生したことを指摘したが、2022年になってからメディアは前者の表現をずっと多く使うようになった。

これはイギリス政府が、先週、新型コロナ対策における法律による義務化事項を廃止して、市民の自己責任において感染防止を図る方向にスタンスの変更を発表したことによると考えられる。

もちろんパンデミックの初めから、われわれは「コロナとともに暮らすこと」を学び、流行の激しい時期を感染しないように切り抜ける努力を続けてきた。

換気とマスク着用が重要であることも学んだ。正確な情報を明確に人々に送り届けることの重要性、そして、呼び掛ける対象に合った適切な伝達方法を工夫することの重要性も学んできた。

感染に弱い人々を援助し、適切なケアと経済支援を行ってきた。新型コロナウイルス収束のために国内における格差と国際的格差を是正して、地球全体で協力する事の重要性も学んできた。

「living with covid」という慣用句が、もうこれ以上議論しないという思考停止の意味でつかわれるのではなく、耐え忍ぶだけでなく、より生産的な関係を作り出すための「学び」を促進するという意味でつかわれるようにすることが必要である。